

今、何故、マレーネ・ディートリッヒなのだろう。

この秋、渋谷のル・シネマで「真実のマレーネ・ディートリッヒ」という映画が単館上映された。ディートリッヒの孫デイヴィッド・ライヴァが監督したドキュメンタリーで、彼女の長い生涯を、数々の友人、知人の言葉や、過去のフィルムを通して、解き明かしたものだ。

映画は、人気を呼び、その後、全国展開されることとなった。これをきっかけに、ディートリッヒ映画祭のようなものも開催され、彼女の古い映画が、一挙に上映されるなど、今、注目をあつめている。ディートリッヒは、190年に生まれ、1992年に、90歳という長い人生を閉じている。リアルタイムで、彼女を体感した人は、ごく限られた世代となってしまう。そのマレーネが、何故、気になるのだろう。

エレガントで、ゴージャス。イブニングドレスに毛皮。そして、宝石。細い眉。こけたほほ。男を惑わす、いたずらっぽい表情。百万ドルの保険がかけられた美しい脚。

マレーネを見出した監督スタンバーグの作り出した退廃的な大人の女のイメージ。それはよく知られているが、今、わたしたちをひきつけるのは、そうした、イメージの向こうにいる、もう一人のマレーネ。意志的に人生を選び取り、危険も辞さない、勇敢で、やさしくて、挫折を乗り越えた、新しい、そして本物のマレーネなのではないか。

本名、マリア・マグダレーナ・ディートリッヒ。190年、ドイツ、ベルリンに裕福な家庭の女として生まれている。父は貴族の出身ともいわれ、母の実家は、宝石商だった。

1924年、映画助監督ルドルフ・ジューバーと結婚。娘マリアをもうけている。「嘆きの天使」で、鮮烈なデビューをし、きまじめな教師を翻弄する若い娘を演じた頃、彼女は、すでに4歳の娘の母親だった。監督ジョセフ・フォン・スタンバーグは、女優としての彼女にも、一人の女性としての彼女にもほれこみ、彼女を連れて、ハリウッドにのりこんだ。そこから、大スターとしてのマレーネの人生

著作権の都合により掲載できません

がはじまる。ドイツ時代には、今ひとつ、垢抜けない印象だったが、その美しさには、磨きがかかり、妖艶で、小粋なマレーネのイメージができあがるのだ。

夫のジューバーとは、お互い、愛人を作りながら、生涯別れず、娘マリアの、よき父と母であり続けた。ジューバーには、元ロシア貴族の美しい愛人がおり、マレーネとも、マリアとも、いい関係を保っていた。(しかし、その女性は、次第に神経を蝕まれていった)

一方、マレーネの愛人と噂されたのは、作家のヘミングウェイ、レマルク、俳優ジャン・ギャバン、ユル・プリンナー、アメリカ大統領ジョン・エフ・ケネディと、錚々たる顔ぶれである。なかでも、公認の恋人だったのは、ジャン・ギャバンで、同棲もしていたらしい。しかし、ギャバンは決して離婚しようしないマレーネに業を煮やし、普通の結婚をするため、去っていった。

マレーネが、40歳を迎える頃、第二次大戦がはじまった。「戦争がわたしの原点」とマレーネは語っている。

ベルリン生まれのマレーネを、ヒトラーは広告塔にするため、ハリウッドから

呼び寄せよう

とする。彼女は、断った。それどころか、ナチを批判し、アメリカ市民権を取得してしまう。ナチス・ドイツは、マレーネに裏切り者の烙印を押し、彼女の映画を上映禁止にした。

マレーネは、アメリカのため、仲間、最前線を慰問に歩いた。兵士の士気を高めるため歌ったのが、リリー・マルレーンだった。映画のなかでマレーネは「いつドイツ軍につかまるか、こわくてたまらなかつた」と語っている。ドイツ人でありながら、ドイツの宿敵である、アメリカ兵の慰問をしているのだ。なにをされてもおかしくない。きっと丸坊主にされるだろう、と。しかし、彼女の感じていた危険は、そんな程度ではなかったはずだ。

彼女が捨てたベルリンには、母が一人暮らしていたのだ。いわば、家族を人質にさしだしての、ドイツ批判である。並みの強さでできることではない。マレーネが、母の無事を確かめることが出来たのは、戦争が終結してからだった。その後、やっとのことで再会を果たすが、数ヵ月後、母はひとりベルリンで病死する。マレーネに合えてよかったと言い残して。母もまた、娘と同様、気丈な女性だった。

公式にドイツに戻ったのは、1960年だった。反戦歌リリー・マルレーンを歌うために。90歳でなくなったとき、その亡骸は、故郷ベルリンに運ばれた。棺は、車に乗せられ、ひっそりと墓地に向かったのだが、口コミで、それが市民に伝わった。車が通ると、人々は買ったばかりの花をそなえ、到着した頃には、花で棺が見えなかったという。マレーネは、故国に愛されて、生涯を閉じた。

勇敢で、正義感の強かったマレーネだが、それだけでは、無論なかった。宝石職人の孫であったマレーネは、天性、宝石の似合う女だった。

「真実のマレーネ・ディートリッヒ」にも、美しいダイヤモンドのドッグネックレスを光輝かせて歌うディートリッヒの姿があった。このときの彼女は、すでに、70をこえていたらしいが、その妖艶な美しさは、奇跡というのにふさわしいのではないか。

彼女自身が、宝石だったのである。そういえば、友人のひとりだったジョン・

レノンは、当時66歳だったマレーネをこう評している。「きらめく宝石」と。

マレーネは、衣類と同様、自分のイメージにあう宝石を自分で買っていた。戦争にも、宝

石にも、マレーネは、自分の意志を貫いた。ことに愛したのは、エメラルドとダイヤモンド。それ以外は宝石ではない、と言ったとも伝わっている。

マレーネの伝記作家でもある娘マリアによれば、マレーネは、膨大な数のエメラルドをあつめていた。彼女の宝石箱は、蓄音機と同じくらい大きい革の箱だった。どれも完璧な宝石で、おはじきより小さなエメラルドはひとつもなかった。そしてダイヤモンドは、4カラット以下のものは、なかった。

とくに大きいエメラルドは、バングルにとりつけると、マレーネの手首がかけられるほどだった。彼女のコレクションは、はめ変えができるようにつくられていた。彼女の決めたコンビネーションどおり、宝石を選ぶのは、娘マリアの役目だった。

「今日はクリップが一つと、指輪と、中型のブレスレットよ」と母がいうと、マリアは器用な動作で、大きなエメラルドを指輪の台にかちりとはめ、別のブレスレットにとりつけた。すると「白い炎のなかにミニチュアの緑の湖が出現する」と彼女は書いている。地金は、プラチナだっ



たのだろう。

マレーネはまた、結婚指輪のコレクションをしていた。それは、エルメスの裁縫箱にいれてあった。あらゆる男女が贈ったらしい。マレーネは、女性にも、愛されたのだ。贈り主が訪ねてくると、そのひとつにももらったものをはめていた。ジーバーから贈られた自分の結婚指輪はなくなっていた。

彼女の数多い出演作のなかで、とくに、宝石の登場する映画といえば、なんといっても「真珠の頸飾」である。宝石使いの名手である監督、エルンスト・ルビッチがプロデュースしている。相手役は、名作モロッコと同じ、ゲーリー・クーパーだ。このめちゃめちゃお洒落な映画は、恋愛部分は、それほど新鮮味もないが、何しろ痛快なのは、映画の冒頭、美しく気品ある宝石泥棒マレーネが、老舗の宝石店から極上の宝石を奪い取る、その洒落た手口である。

巴里の老舗デュバル宝石店に、美しいマダムが来店する。白いドレスに身を包んだディートリッヒである。

「最高の真珠をさがしている」というので、オーナーのデュバル氏が、みごとな真珠のネックレスを捧げて現れる。「4年半かけて、最高の粒を集めました」均整の取れた芸術品です「人魚の涙といってもよいでしょう」なるほど、白雪のように美しい。

マダムは、惚れ惚れと眺め、自宅に届けるように、と申し付ける。夫は、著名な精神科医のポケー氏だという。だが、この取引を疑うだろうか。

次に、謎のマダムは、ポケー氏のもとに現れた。夫の精神状態がおかしいので、診てほしい、と依頼したのだ。ポケー先生が承諾すると、マダム・デュバルが（そう名乗った）一言、付け加えた。「夫は初対面の人に請求書を渡す癖があるんです」痴呆のきざしでしょう。受け取っておきましょう」ポケー氏が落ち着いたいった。

やがてデュバル氏が、「人魚の涙」をたずさえてやってくる。そこには、マダム・ポケーがいた。いや、ポケー氏にとっては、マダム・デュバルなのだが……。このあと、二人の紳士がどんなやり取りをするかは、ぜひ、ビデオかDVDで確かめていただきたい。抱腹絶倒うけあいだ。昔の映画なんて、退屈そうと思っている方にこそ、お勧めしたいものだ。

この他、マレーネが、ロシアの女帝、エカテリーナ2世に扮した「恋のページェント」でも、豪華なドレスとともに、きらびやかな宝石を堪能できる。なにしろエカテリーナのダイヤモンド好きはスケールが大きく、袋詰め

のダイヤモンドが、貨車何台分もあったという。また、次つぎと恋人を選んで、代えたことでも有名だ。政治と、恋と、宝石と。これこそマレーネにしかな演じられない。可憐な娘から、自信に満ちた美しいエカテリーナに成長する様子が、わたしには、マレーネ自身の軌跡とだぶってみえてしかたが

なかった。

ゴージャスな宝石を愛し、実生活でも、スクリーンのなかでも、極上の宝石に囲まれ、自身がそんな宝石のようだったディートリッヒだが、あるエッセイに、こんな一文を寄せている。

「バラ石英(ローズクォーツ)は、小さな女の子にも合う石です。娘マリアへの母としての視線が感じられる。しかし、マレーネは、こうした素朴なものも愛することのできる女性だった。お気に入りの花は、すみれだったとか。これもディートリッヒの一面なのだ。



岩田 裕子(いわた ひろこ)

東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学文学部卒業(西洋史専攻)編集者を経て、少女雑誌、ファッション誌などに記事を執筆。現在は、宝石・妖精のエッセイストとして活躍。

岩田 裕子 著

妖精のレッスン



エー・ジー出版 定価1,500円(税別)

今どきの妖精ジジが、迷える女性たちへ「自由な生き方」をレッスン。もっと気ままに、もっと自分らしく生きたいあなたに、50のレシピを教えてください。

ジジは、花のドレスよりダナ・キャランが大好き。朝からサンバを聞いてお風呂に入ったり、南極の海でデートしたり…。親友の春風ほのかは、彼女の影響ですてきに変身していきます。宝石、ファッション、恋の必勝法など、妖精気分ですらす方法がいっぱい。

アンアンなどで活躍する飯田淳さんの妖精イラストがキュートです。

読んでみたい方は:エー・ジー出版(06-6478-5109)にお問い合わせください。